

21世紀の保健医療福祉専門職学生を育てる：国際交流により強化された多職種連携教育の実践

新潟医療福祉大学理学療法学科・古西勇, 押木利英子
 Angeles University Foundation・
 Carmelo C. Cunanan, Pia Vanessa C. Basilio

【背景】

保健医療福祉関連専門家の多職種間の連携能力は対象者のアウトカムによりよい効果をもたらすが、大学において教育カリキュラムへの多職種連携教育 (IPE) の統合は多くの努力を必要とする。21世紀におけるグローバル化という環境の大きな変化は、異文化理解という課題を教育に突き付けており、日本においてもその課題を踏まえた IPE への要求が高まっていくと考えられる。国境を越えて複数の大学と一緒に教育に取り組むその要求に応えるということは、グローバルな視点を備えた専門家の育成という成果につながるであろう。

本研究の目的は、大学間の国際交流の強みを活かして実践された保健医療福祉の専門職学生を養成する大学における IPE の成果を述べることである。

【方法】

フィリピン共和国ルソン島中部、パンパンガ州アンヘレス市にあるアンヘレス大学 (Angeles University Foundation) 医療関連専門職学部 (CAMP) の理学療法学科 5 年生の学生 2 名が CAMP 教員 (理学療法士) 2 名とともに 2012 年 9 月に来日し、新潟県新潟市で新潟医療福祉大学が開催した連携総合ゼミに参加した。連携総合ゼミは、新潟医療福祉大学の 10 学科を横断した 4 年次の保健医療福祉基礎科目群の選択科目の一つであり、新潟県内の他大学からの参加者を含め 2012 年度は約 100 名が参加し、そのうち 6 名がフィリピンの学生と一緒にゼミに配属された。6 名はいずれも本学の学生で、理学療法学科、作業療法学科、義肢装具自立支援学科、健康栄養学科、社会福祉学科から各 1 名が参加し、1 週間のゼミ形式での議論を行った。ゼミ内の議論は英語で行なわれた。

アンヘレス大学と新潟医療福祉大学は 2009 年から国際交流を開始し、その関係の継続と発展のため 2010 年 8 月に国際交流の覚書を交わした関係にある。CAMP 教員 2 名は 2011 年にも新潟医療福祉大学の国際交流事業で連携総合ゼミに指導教員として参加していたが、アンヘレス大学の学生がゼミのメンバーとして参加するのは今回が初めてであった。

【結果】

脳血管障害のある 60 歳代の地域在住フィリピン人男性が、対象事例として提示された。事例はアンヘレス市より北方のマガラン区においてアンヘレス大学が 2011 年から支援している地域に根ざしたリハビリテーション (CBR) で理学療法学生 (実習生) の訪問リハビリテーションを受けている。

Problem List

1. Tightness, weak muscle, and poor posture	1.筋伸張性の低下,筋力低下,不良姿勢
2. ADL's	2.ADL能力の低下
3. Insufficient government support	3.公的支援が得られない
4. No assistive device and wheelchair	4.自助具、車椅子購入が困難
5. Undernourished, dysarthria, facial asymmetry and tongue deviation, memory and problem solving	5.低栄養,構音障害,顔面麻痺,記憶・問題解決障害
6. Lack of mental /emotional support	6.精神状態
7. Low income	7.低所得
8. Poor housing structure and sanitation	8.非衛生的,劣悪な家屋状況
9. Wife has care burden	9.妻の負担が大きい

図 1. IPE の議論を通じてリスト化された対象者の問題

ゼミ内の議論は、最初は、事例の背景を理解するため教員も参加してフィリピンと日本の保健医療福祉制度の違いを比較することから開始した。次に、対象者の生活機能の詳細を学生間で議論した。主観的、客観的評価として、ゼミに参加したフィリピンの理学療法学生が実習生として対象者から直接得た情報を用いた。議論を通じて、対象者の問題をリストにし、それぞれの職種の立場から解決策を立案してもらい、それを皆で議論した (図 1)。

解決策を議論する際には、貧困や限られた社会資源といった現状や、現地で手に入るものでできることを考慮し、連携を重視した。例として、健康栄養面から野菜摂取不足の問題を解決するためには、家庭菜園により自給を促し、同時にその作業の一部をリハビリテーションの活動とするなどである。ゼミの最終日に、その成果を他の参加者の前で発表した。

【考察】

国境を越えて複数の大学と一緒に IPE に取り組むことは、異文化理解を通じてグローバルな視点を持った学生を育てる絶好の機会といえる。保健医療福祉専門職の役割は、一方で、病院や施設で働く場合は分業化された環境におかれ、CBR など地域で働く場合は他の専門職の不在から自分の専門にだけこだわってはいられない環境におかれる。IPE で学んだ経験は、病院や施設で働く機会の多い日本の学生のみならず、CBR での活躍が期待されている開発途上国の学生にも役立つかもしれない。IPE で議論した解決策を実際に CBR の現場で提案して試してみるなど、実現可能性の検討を含めた今後のさらなる研究が必要と考える。

【結論】

大学間国際交流により強化された IPE の実践は、21 世紀のグローバルな視点を持った医療福祉専門職学生を育てる先駆的な試みであるといえる。